

前5世紀後半のアテナイと黒海

篠崎三男

Athens and the Black Sea in the Second Half of the Fifth Century B.C.

SHINOZAKI Mitsuo

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the political and military activities of Athens in the Black Sea region (Pontus) in the second half of the fifth century B.C. Pericles' Pontic expedition ca. 437 B.C. marked an epoch in the relations between Athens and Greek communities of the region (Plut. *Per.* 20. 1-2). Demonstrating the unchallenged Athenian sea power, this enterprise brought the whole area of the Black Sea under the Athenian control. Afterward a considerable number of Pontic poleis joined the Athenian maritime league. These newly acquired allies were assessed for payment of tribute in 425/4 B.C. (*IG I³* 71, IV, ll. 126-172). We can conclude that through the 430s and 420s B.C. Athens tried seriously to establish the hegemony over the Black Sea region.

はじめに

古代ギリシア世界の北東周縁部を形成する黒海（ポントス）¹⁾の沿岸には、「大植民」期（前750年頃～前550年頃）の後半に、多数の植民市が建設された。一般に、ギリシア植民市はその発展の過程で、自己の後背地を構成するバルバロイ的な民族・文化環境との多様な相互作用を通して独自の小世界を形成したが、他方では、エーゲ海域の中心世界との緊密な関係を維持することによってギリシア的ポリスに共通する一連の特徴を獲得した。それゆえ、黒海沿岸のギリシア植民市の歴史的発展も、ギリシア世界全体の「中心と周縁」の構造の中で捉え直さねばならない。これまで筆者は、黒海北岸のギリシア植民市と遊牧スキタイ人を中心とするバルバロイ諸族との相互関係に焦点をあてて、黒海沿岸ギリシア世界に固有な発展過程の解明を試みてきたが、ギリシアの中心世界と黒海沿岸ギリシア世界との相互関係については、植民期におけるイオニアの母市（特にミレトス）と植民市との関係と、古典期におけるアテナイとボス

ポロス王国との関係について、概略を述べるにとどまった。とりわけ、前5世紀におけるアテナイのポントス政策については、その重要性は認識しつつも、ほとんど触れることはできなかった²⁾。

この小稿では、アテナイの「帝国支配」の中でのポントス政策の問題を取り上げる。前5世紀、特にその後半に、アテナイの政治的・軍事的影響力はポントスのギリシア諸ポリスにどれほど広く、またどれほど深く及んだのであろうか。筆者のこれまでの研究が黒海沿岸ギリシア世界の歴史を、その内側から見てきたとすれば、本稿の試みは、それをアテナイという「向う岸から」³⁾見ることになるであろう。

筆者がこの問題に立ち入るのをためらってきた最大の理由は、史料の問題である。前5世紀後半のアテナイのポントス政策に直接的に関係する史料は極めて少ない。ペリクレスのポントス遠征に触れたプルタルコス『ペリクレス伝』20章1-2節の記述。ポントス諸ポリスのアテナイ支配圏への包摂を窺わせる、前425/4年のデロス同盟（第1回アテナイ海上同盟）の貢租査定を記した断片的な碑文（IG I³ 71, IV, ll. 126-172）。事件から70〜80年経ってからではあるが、黒海北岸の一ポリス、ニュンファイオンがアテナイ支配圏から離脱した事情を推測させるアイスキネス第3弁論『クテシフォン弾劾』171-172節の記述。我々が持っている史料は、事実上、この三つに限られてきた。史料不足という状況は、現在でも基本的に変りない。

この限られた史料をもとにして、アテナイのポントス政策の問題は、一方では、デロス同盟に関する欧米の研究者の論考で、他方では、黒海地域の古代史に関する旧ソ連邦の研究者の論考で、少なからず論及されてきた。前者に関しては、1930年代から50年代に集大成された「デロス同盟貢租表」に関する研究と、それを受け継いだ R. メグズの「アテナイ帝国」に関する1972年の著作が特筆される。しかし、全体として、デロス同盟に関する研究では、周縁の黒海地域の問題は付随的に扱われてきたと言わざるを得ない⁴⁾。

旧ソ連邦の古代史研究では、この問題は1950年代から60年代に活発に議論された。とりわけ特筆されるのは、アテナイのポントス政策の意義を否定的に評価し、ポントス諸ポリスの自立性を強調する I. B. ブラシンスキーの研究であり、旧ソ連邦の研究の多くが欧米では無視された中で、ブラシンスキーの見解は欧米の研究者にも大きな影響を与えた⁵⁾。その後、大きな進展は見られなかったが、1980年代になって Yu. G. ヴィノグラードフは自らの碑文学的研究に基づいて、オルビアをはじめとするポントス・ポリスの政治史について一連の大胆な発言を行ない、その中でアテナイのポントス政策にも明確に言及した⁶⁾。もう一つ特筆すべきは、1985年に発表された F. V. シェロフ=コヴェジャエフの「前6〜前4世紀のボスポロスの歴史」と題するモノグラフであり、欧米と旧ソ連邦の両方の関連研究をほとんど網羅した研究史の整理は、とりわけ貴重である⁷⁾。

1990年代以降最近までの研究状況では、ロシア語圏の研究者によって西欧語で書かれた論考の増加、ポントス古代史をテーマとする欧米とロシア語圏研究者の共同研究やシンポジウムの頻繁な開催といった学界状況の変化の中で、ポントス古代史への関心は確実に高まりつつあると言ってよい。数は必ずしも多くないが、本稿の課題と直接に関わる論考もいくつか見出される⁸⁾。

このように著しく限定された史料状況と多様な研究動向の中で、筆者にできることは限られている。本稿では、前5世紀後半のアテナイのポントス政策の展開を、前420年代（前421年の「ニキアスの和約」の頃）まで論究してみたい。アテナイのポントス政策の起点と言うべきペリクレスのポントス遠征と、同じくポントス政策の転換点と位置づけられる前425/4年のデロス同盟の貢租再査定という二つの問題について、先行研究における史料解釈とそれに基づくアテナイのポントス政策に関する理論を整理し、最も可能性の高い作業仮説を提示するのがここでの課題となる⁹⁾。

第1章 ペリクレスのポントス遠征に関する予備的考察

第1節 ポントス遠征の史実性

ペリクレスのポントス遠征の問題を論じるとき我々が最初に直面する障害は、史料ベースの不十分な状況である。この遠征について明確に伝えるのはプルタルコス『ペリクレス伝』20章1－2節だけであり、古代の他の著作家にはいかなる言及もなく、とりわけペリクレスの同時代史料として第一級の価値を有するトゥキュディデスは、その著作でポントス遠征について何も述べていない。このため、ペリクレスの時代からはるか後に、「歴史家」ではないプルタルコスが書いた伝記の史料的価値については多くの議論があり、ペリクレスのポントス遠征が実際にあった史実であることを疑問視する研究者も少なくない。ペリクレスの遠征と関わるポントスの諸状況を再構成する予備的な作業として、ここではプルタルコスの記述の史料としての評価、そしてそれと密接に関連する遠征そのものの史実性の問題について、先行研究を検証しておきたい。

たしかに、プルタルコスの記述の評価は難しい。『ペリクレス伝』20章1－2節はポントス遠征について次のように述べる。

「ペリクレスは立派な装備をほどこした大艦隊を率いて^{ポントス}黒海に船を乗り入れ、ギリシア系諸国に対しては依頼された事柄を果してやって友好的に振舞い、附近に住む非ギリシア系の諸民族やその王、首長たちに対しては、アテナイ軍勢の大きさと、どこへでも欲する所に航行して全海域を支配する、恐れを知らない大胆さを示した。またシノペの人々には僭主ティメシレオスに対抗するため、ラマコスを指揮官とする艦船十三隻と兵士とを残しておいた。ティメシレオスとその一党が追放されると、ペリクレスは、アテナイ人で希望する者六百名はシノペに航行し、以前僭主一味が占めていた家屋・土地の分配を受けた上、シノペ人の間に定住すべし、という決議を通過させた。」^[10]

そして、これに続く20章3－4節では、ポントスでの軍事行動と対照する形で、エジプトやシチリアを征圧しようとする市民の欲求に対する、ペリクレスの賢明な抑制策が述べられる。

プルタルコスはこの情報を引き出した典拠を示しておらず、また時期確定のためのクロノロジー的な手掛かりも見出せない。具体的な事件と呼べるのは、シノペにおける僭主ティメシレ

オスに関わる事件だけである。後述するように（第2章第2節）、ティメシレオスの名前が復元できる碑文の断片が黒海北岸のオルビアで発見されたことから、ティメシレオスの実在は疑いなく、この部分の記述が史実であることは認められる。これに対して、それに先行するポントスでの行動全般への言及については、ポントスのギリシア人に対する友好的な振舞いとバルバロイに対する海軍力の示威行動の対照に、「ヘレニズムの擁護者」というレトリックを読み取ることができるかもしれない¹¹⁾。また、この部分を、ペリクレスの「反僭主政策」の実例として引き出されたシノペ事件への「レトリック的説明」とみなす研究者もいる¹²⁾。たしかに、プルタルコスが与える情報に対して、過度の読み込みは危険かもしれない。

ペリクレスのポントス遠征の史実性に関して、先行研究はプルタルコスの記述の読み方にしただって三つの見解に分かれる。第一は、プルタルコスの記述全体を疑い、遠征の事実そのものを疑問視する見解である。第二は、プルタルコスがシノペ事件しか述べていない事実を重視し、遠征は史実として認めるが、その範囲を黒海南岸に限定し、他の地域、特に北岸へのペリクレスの航行を否定する見解であり、ブラシンスキーがその代表である。第三の立場は、プルタルコスの記述全体を事実とみなし、「立派な装備をほどこした大艦隊」¹³⁾の遠征の目的は南岸だけに限られず、北岸を含むポントスの全域に及んだとみなす。メグズに代表されるデロス同盟の一般的研究の多くがこの見解に与した。ロシアのポントス史研究をリードしてきたヴィノグラードフも明確にこの立場をとる。ポントス遠征の地理的範囲をめぐる二つの見解については次章で検討することにして、ここでは遠征の史実性そのものに対する懐疑論を見ておこう。

最も極端な否定論は、P. フェラレーゼの説である。それによれば、ペリクレスのポントス遠征は歴史的事実ではなく、前4世紀のアテナイにおいてマケドニアとの闘争の中で強まっていくパンヘレニズム的思潮から作り出された、プロパガンダを目的とする虚構であった¹⁴⁾。しかし、この主張を裏づける論拠は同時代の作家、トゥキディデス、クセノフォン（『アナバシス』）、さらには劇作家エウリピデス（前431年に上演された『メデシア』）がペリクレスのポントス遠征について全く触れていないという「沈黙の論証」だけであり、「ペリクレス神話」の創作を証明する積極的な論拠が提起されていないことは、既に厳しく批判されている¹⁵⁾。

碑文の年代決定に関して独特の見解を主張してきた H. B. マッティンリは、ペリクレスのポントス遠征との関連で論じられる碑文・貨幣史料の年代を通説の前430年代から前420年代へ引き下げ、アテナイのポントス進出をペリクレス時代よりも後の時期に関連づける。それによれば、プルタルコスは、ペリクレスの平和時のポントス巡航と、トゥキディデス（IV 75）が述べている前424年のラマコスのポントス遠征とを混同した可能性がある。また、シノペを含むポントスへの植民者派遣については、当時のアテナイにはそれを行なうだけの人的資力はなく、別の時期の、あるいは別の地域への植民に関する情報を、「歴史家」ではないプルタルコスが誤解した可能性が考えられる¹⁶⁾。前5世紀のアテナイのポントスへの関心は、穀物交易を別とすれば、きわめて限定されていたというのがマッティンリの結論である¹⁷⁾。ただし、この論考では、碑文と貨幣の年代決定に関する自説のきわめて詳細な説明はあるが、ペリクレスの遠征の史実性を否定するという論理的帰結そのものについては、論拠は十分とは言えない¹⁸⁾。

G. R. ツェツフラゼは、プルタルコスを初期ギリシア史の史料として使うことに誰もが懐

疑的なのに、ペリクレスの遠征に関しては實際上誰もが彼の証言を信じる、という史料としてのプルタルコス の扱い方への疑問から出発する。ツェツフラーゼによれば、プルタルコスの情報源は確定困難であり、ペリクレスの遠征についてプルタルコスの記述は確証も論駁も与えないから、考古学・碑文学・古銭学から得られるデータとそれを比較するのが唯一可能な方法となるが、その結果はすべて遠征の事実を信じることを困難にする。結論として、ツェツフラーゼは、ペリクレスの遠征は虚構であるか（上述のフェラレーゼの説）、もし事実であれば、せいぜい南岸に限られたとみなす¹⁹⁾。その論拠は、次章で検討する間接的証拠をほぼ完全に否定することであるが、その中で興味深いのは、ポントス遠征の目的ないし原因としてしばしば強調される、前5世紀のアテナイの黒海からの穀物供給への依存度の高さは、ボスポロスの領域の穀物生産量に関する考古学の知見に照らして、誇張にすぎないと見ていることである²⁰⁾。上述したマッティンリの結論と比較すると、経済（穀物供給）と政治（同盟支配・貢租徴収）との関係をどう見るか、両者は切り離せるものか、それとも一体のものなのか、という重要な問いが提起できるかもしれない。

最後に、懷疑説に共通すると思われる、トゥキュディデスがペリクレスのポントス遠征に沈黙しているという論拠について検討しておきたい。まず指摘できるのは、いわゆる「五十年史」の重要な事件でトゥキュディデスが言及していないのは、ポントス遠征に限らないということである。デロス島からアテナイのアクロポリスへの同盟財務局の移転（前454年）、ペルシアとの「カリアスの和約」（前449年）、メレシアスの子トゥキュディデスのオストラキスモス（前443年）など、この時期の歴史を再構成するのに不可欠な重要事件についてトゥキュディデスは触れていない。トゥキュディデスはペロポネソス戦争に直接結びつく事件だけを取り上げたとすれば、ポントス遠征について述べる理由はなかったと考えられる²¹⁾。他方では、トゥキュディデスが語るペリクレスの演説の「帝国主義的レトリック」には、ポントス遠征に関するプルタルコスの記述と共鳴するものを見出すこともできる。前431/0年冬に行なわれたペロポネソス戦争初年度の戦死者のための国葬演説（Thuc. II 41. 4）に見える「われらは己の果敢さによって、すべての海、すべての陸に道をうちひらき、地上のすみずみにいたるまで悲みと喜びを永久にとどめる記念の塚を残している」とか、前430年に行なわれたペリクレスの最後の演説（Thuc. II 62. 2）の「諸君が現在船を浮べている水域は言うまでもなく、望みさえすれば遙かに広い海が諸君の領域となる」といった、他国の挑戦を許さないアテナイ海軍の力の誇示は、この演説の数年前に行なわれたと考えられるポントス遠征を背景にすれば、より説得力を持ったであろうと言われる²²⁾。トゥキュディデスの「沈黙」は、ペリクレスのポントス遠征の史実性を否定する絶対的な根拠とは言えない。

プルタルコス『ペリクレス伝』のポントス遠征に関する記述に対して、我々はその道徳的・修辭的性格を強調するよりも、その实际的性格を重視する立場に与したい。ポントス遠征の叙述をシノペ事件の「レトリック的説明」とみなす前述の見解とは逆に、シノペ事件の叙述のほうが、「立派な装備をほどこした大艦隊」を率いたペリクレスのポントスへの拡大政策を例証する「付録」²³⁾であり、条件さえ許せば、同様のことはポントスの他の都市でも起こりえたと考えられる。

第2節 ポントス遠征の背景

ペリクレスのポントス遠征と関連づけて議論される様々な状況証拠のうち、最初に、ポントス遠征の背景を理解するために、当時のアテナイの外交政策の最重要課題の一つと目される、穀物供給ルートの確保の問題を見ていこう。

ポントス遠征に関する記述に続く『ペリクレス伝』20章3－4節でプルタルコス²⁴⁾は、当時、アテナイ市民たちが偉大な国力と幸運にすっかり調子づいて、「エジプトをもう一度征圧しようとか、ペルシア帝国の沿岸部〔の反乱〕をけしかけようとか言っ」たり、「多くの人々はすでにこの頃からシシリーに対して、後日アルキビアデス一派の弁論家たちが実際に燃え上らせたあの忌々しい執着^{エロス}に取り憑かれて躍起になっていた」と述べている。我々はここでもプルタルコスの記述の史料的価値を見出すことができる。なぜなら、市民たちの支配への欲望の矛先であるエジプト、シチリア、そしてポントスこそ、まさにアテナイの主要な穀物供給源だったからである。

最初、アテナイはエジプトを選択した。アテナイは、ナイル・デルタに戦略拠点を確立すべく、前459年から6年に及ぶ大規模な遠征を行なったが、前454年に200隻もの艦船を失って、壊滅的敗北を喫した。結局、前449年の「カリアスの和約」の締結後、アテナイはエジプト干渉政策を完全に放棄した²⁴⁾。前440年代になると、西方の南イタリアとシチリアでアテナイの活発な外交政策が展開された。レギオン、レオンティノイ、メタポンティオンなどの諸都市と同盟が結ばれた。そして前444年にはアテナイの主導でトゥリオイ植民市が建設された。しかし、トゥリオイ建設はアテナイの拡大の頂点であり、アテナイの支配に対する現地勢力の抵抗やペロポネソス同盟側の敵対行動もあって、前430年代末までに、この方向での海上ルートを統制する政策は挫折した²⁵⁾。

このような状況で、エジプトと南イタリア・シチリアの穀物市場が接近困難と判明したとき、アテナイは第三の潜在的な穀物供給源であるポントスへ目を向けたのであった。既に前447年頃、ペリクレスはトラキアのケルソネソスに遠征を行ない、アテナイ人1000人を追加植民者として連れて行って、この地の都市の強化に努めた。これもプルタルコスだけが伝えている事件だが(Plut. Per. 19. 1)、この時期にケルソネソスで戦死したアテナイ人の名簿を記した碑文が残っており(IG I³ 1162)、プルタルコスの記述の正確さを裏づけている。前437～前436年には、当時ペリクレスと競っていた指導者ハグノンによって、トラキアのアンフィポリス植民市が確立された(Thuc. IV 102)。さらに前435年に、プロポンティスのアスタコスへ植民者が送られた(Diod. XII 34. 5; Strabo XII 4. 2)。北エーゲ海とプロポンティスでの植民市の建設は、アテナイの帝国戦略の重要な一環となっていた²⁶⁾。

このように北東方面へのアテナイの影響力が強まる中、前440年にポントスからの穀物供給への不安を高める事件が起こった。最も有力な同盟国の一つサモスがアテナイから離反し、それに呼応して、黒海の入りを押さえる要衝ビュザンティオンも反乱を起こしたのである(Thuc. I 115)。アテナイは、ペリクレス自らが艦隊を指揮して出動し、9ヶ月の攻囲の後、サモスを降伏させた。ビュザンティオンも「反乱蜂起前と同様にアテナイの隷属国となる条

件で降伏を申入れた」(Thuc. I 117)²⁷⁾。ビュザンティオンの反乱は、ポントスからの穀物供給が途絶える現実的な危険性をアテナイ人に実感させたに違いない。穀物輸送ルートを統制するためには、エーゲ海側のヘレスポントス海峡を押さえるだけでは不十分であり、ポントス側からの進入路を確保することも必要であった。この課題を実行すべく、ペリクレスはポントスへ自ら遠征を企てたのである²⁸⁾。

ポントス遠征が行なわれた年を正確に確定するための手掛かりはない。サモス戦争が終結した前439年からペロポネソス戦争が始まる前431年までの間のいずれの年も考えられるが、エピダムノスをめぐる緊張が高まる(Thuc. I 24-51)、前435年よりも前の時期の可能性が高く²⁹⁾、ポントス遠征は前437年頃に行なわれたとみなす研究者が多い³⁰⁾。ペリクレスは黒海南岸に達しただけで北岸までは行っていないとみなすブラシンスキーは、ポントス遠征は独立した作戦ではなく、サモスとビュザンティオンの反乱を制圧する作戦の最終局面の一事件に過ぎないとみなし、ポントス遠征はサモス戦争が終結した前439年夏に行なわれたと主張した³¹⁾。ポントス遠征の地理的範囲とその意義を限定的に評価するブラシンスキーの見解については次章で検討するが、上述したポントス遠征の背景に関する我々の理解が正しければ、ペリクレスが自ら指揮したポントス遠征は、サモス戦争の延長上にある単なる一事件ではなく、十分に計画された戦略であったとみなすべきである。また、プルタルコスがサモス戦争について詳細に記述しているが、ペリクレスはサモスを平定してアテナイへ帰ると、この戦争で死んだ人々の葬儀を盛大に行ない、追悼演説で人々に感銘を与えたと述べており(Plut. *Per.* 28. 3)、サモス占領直後にポントスへの本格的な遠征を行なう時間的余裕はなかったと思われる³²⁾。ポントス遠征は前437年頃に行なわれたという多数説を疑う根拠はなく、我々もこれに従いたい。

このような背景を確認して、次章では、ポントス遠征と関係づけられる間接的史料の検証を通して、ポントス遠征を再構成する試みに着手しよう。

第2章 ペリクレスのポントス遠征の再構成

第1節 黒海南岸

ポントス遠征の直接的な目的はトラキアのボスポロス海峡地域の交易ルートの統制にあったから、ペリクレスの艦隊が最初に向かったのは、海峡のすぐ東に続き、交易活動が最も早くから発展していた黒海南岸であった。

この地域で最初に出会う重要な都市は、ヘラクレイア(現在のトルコのエレーリ)である。前560年頃にメガラ人によって建設されたこのドーリス系植民市は、土着のマリアンデュノイ族を征服して広大な領域を獲得し、同時に、黒海の北岸や西岸の都市との活発な交易で繁栄していた。ペリクレスの艦隊がこの都市に寄航したことを証明する史料はないが、ヘラクレイアは、次章で検討する前425/4年の貢租再査定を記録した碑文でその名前が最も確実に復元される都市である。また、ヘラクレイアがビュンザンティオンと同じメガラの植民市であったことから、ビュザンティオンがアテナイから離反した際に、ヘラクレイアとの間に何らかの接触があった可能性も推測されている³³⁾。ペリクレスの艦隊がヘラクレイアに寄航し、この「潜在的

な敵」を牽制した可能性はかなり高いと思われる³⁴⁾。

次に会える重要都市はシノペ（トルコのシノップ）である。ミレトス人によって黒海沿岸に建設された最も古い植民市であるシノペは、黒海南岸に沿って東方へコテュオラ、ケラスス、トラペズスといった従属植民市を建設し（Xen. *Anab.* V 5. 7; V 3. 2; IV 8. 22），大きな勢力圏を確立していた。またシノペは、南岸のカランビス岬と北岸のクリミア半島南端のクリュー・メトープン岬を結ぶ、黒海を縦断する最短航路を統制する戦略上重要な位置を占めていた³⁵⁾。

プルタルコスの記述から、ペリクレスはシノペを訪問しただけでなく、僭主ティメシレオスと戦う民主派を支援するため、ラマコスの指揮下に13隻の艦船と兵士を残したことがわかる。僭主の追放に至る経緯は不明であるが、前439年から前435年の間に年代づけられるアテナイの戦死者リストの断片に，*ἐν* [Σιν]όπῃ（「シノペで」）という文字が確実に復元されており（IG I³ 1180, l. 3），この戦死者リストの断片は、ペリクレスの遠征とそれに続くシノペでのアテナイ人の軍事活動と関連づけることができる³⁶⁾。

ペリクレスのポントス遠征の史実性を疑問視する研究者が依拠する論拠のうちで、これまで触れてこなかったのは、前400年にギリシア人傭兵部隊を率いてシノペに立ち寄ったアテナイ人のクセノフォンが、シノペ人は「ミレトスからの移住民」であると述べているだけで（Xen. *Anab.* VI 1. 15），アテナイからの植民者の存在については全く触れていないのは、600人のアテナイ人のシノペへの派遣が事実ではなかったからであるという主張である³⁷⁾。これも典型的な「沈黙の論証」であるが、シノペがミレトスの植民市であることは既に定着した伝統であり、特別な説明を要しなかったであろう。さらに、アイゴスポタモイの戦い（前405年）の後、スパルタの海軍提督リュサンドロスは、アテナイの町とペイライエウス港に人を溢れさせて食糧不足に陥れるために、ビュザンティオンやカルケドンなどからアテナイ人守備兵や他のアテナイ人を祖国へ強制送還する作戦をとった（Xen. *Hell.* II 2. 2）。シノペのアテナイ人入植者もこのとき追放されて、アテナイへ帰還した可能性がある³⁸⁾。30年ほどの短い期間の、しかも限られた数のアテナイ人入植者の存在は、シノペの伝統に大きな影響を及ぼすことはなかったのであり、クセノフォンがシノペをミレトス人の植民市と呼んだのは当然のことであった。

ペリクレスの遠征との関連でアテナイ人の植民の可能性が論議される南岸のもう一つの都市は、アミソスである。アミソスは現在のトルコの都市サムスの西方3kmに位置した。ストラボンによって引用されたテオポンポスの記述によれば、アミソスは「最初ミレトス人によって建設され、〔次いで〕カッパドキア人の統治者〔によって支配され〕³⁹⁾，第三にアテノクレスとアテナイ人によって植民されて、その名前をペイライエウスと変えた」（Strabo XII 3. 14; Theopompos *FGrH* 115 F389）。またプルタルコス『ルクルス伝』19章6節によれば、アミソスは「アテナイの植民市で、ちょうどアテナイの勢力が絶頂に達し、海上を支配していた」ときに建設したものであった。アッピアノスも、アミソスはアテナイによって、アテナイが「海上の絶対支配権を握っていた」ときに建設されたとする（Appian. *Mithr.* 83）。たしかに、これら後代の情報は、いずれもアテナイによるアミソス植民の時期に関して明確さに欠けている。ペリクレスの遠征に伴うシノペへの植民を疑問視するマッティンリは、アミソスをアテナイが黒海南岸に建設した唯一の植民市とみなすが、その時期を前4世紀半ばへ引き下げる⁴⁰⁾。他方、

前430年代のアテナイの北東方面への植民市建設政策を重視するメグズは、アスタコス、シノペと並んでアミソスもこの時期の植民市に含めている⁴¹⁾。アミソスは、前述したカランビスとクリウー・メトープンを結ぶ航路と並んで、南岸のテミスキュラと北東岸のシンディケとを結ぶもう一つの黒海縦断航路を押さえる位置にあった。この戦略的意義を考慮すれば、プルタルコスとアッピアノスの記述にあるアテナイの海上支配の絶頂期をペリクレスのポントス遠征と、あるいは、それに続くアテナイの帝国支配の時期と結びつける可能性は認められる⁴²⁾。

第2節 黒海北岸

ペリクレスのポントス遠征に関して最も活発な論争が展開されたのは、この遠征が黒海北岸にまで達したのかどうかという問題である。北岸地方には二つのギリシア的小世界が形成されていた。北西部にはオルビアを中心にして、テュラス、ニコニオンなどのポリスが散在した。一方、北東部のキンメリアのボスポロス海峡周辺（以下、ボスポロスと略記）には、パンティカパイオン、ニュンファイオン、ファナゴレイアなど、やがてスパルトコス朝のボスポロス王国に統合される多数のポリスが密集していた。この二つのギリシア的小世界、とりわけ後者は、アテナイの重要な穀物供給源となった。

次章の結論を先取りすることになるが、前425/4年に貢租を査定された同盟国のリストの断片には、黒海北岸のいくつかのポリスがかかなりの確度で復元できる。いつ、どのような状況でこれらのポリスはアテナイの支配圏に組みこまれたのであろうか。当然、この時期のアテナイのポントス政策で唯一知られているペリクレスの遠征との関連が想定されるが、直接それを裏づける証拠を我々は持っていない。したがって、我々は状況証拠と論理的考証から、ペリクレスの遠征がボスポロスとオルビアに達した蓋然性を論じることになる。

ブラシンスキーは、ペリクレスの遠征はサモスとビュザンティオンに対する征討作戦の延長であって黒海南岸に達しただけであるという立場をとって、ペリクレスの遠征が北岸に及んだ可能性を明確に否定した⁴³⁾。その論拠は次のように整理できる。第一に、プルタルコスは、南岸（シノペ）での事件については詳述しているのと対照的に、北岸でのペリクレスの活動には完全に沈黙している。第二に、ギリシア世界の最も端の黒海北岸への遠征は、危険な企てや冒険主義に走らず、友好関係と同盟関係による支配を目指すペリクレスの外交政策と一致しない。第三に、南岸から北岸への短航路は当時まだ開拓されていなかった。また、アミソスまで航行した後にトラキアのボスポロス海峡まで戻り、そこから西岸沿いに北岸まで航行したとすれば、遠征は非常に長期間続くことになり、事実上アテナイを単独支配していたペリクレスがその間アテナイを留守にすることができたのは、まったく疑わしい。第四に、ヘレスポントス海峡とトラキアのボスポロス海峡を支配することによって、アテナイは黒海交易を事実上支配できたのであって、遠い北岸地方での領土獲得の必要性はなかった。逆に、北岸、とりわけボスポロスで、力づくで領土を獲得することは、そこを支配している統治者との衝突へ導く危険性があった⁴⁴⁾。

一見したところ、ブラシンスキーの論拠は非常に説得的に見えるが、これには反論が可能である。プルタルコス『ペリクレス伝』20章1－2節についての我々の解釈は、前述したとおり

である。シノペ事件はポントス遠征全体の叙述にとっての「付録」であって、その逆ではない。したがって、プルタルコスがシノペ事件を詳述したからといって、遠征が北岸には達しなかったことの証拠とは言えない。史料の扱い方に関しては、ブラシンスキーが自己の結論にとって不利になる、前425/4年の貢租査定リストに復元された北岸の都市の名前を、石に残っているわずかな文字だけからの復元は確実でないとして、完全に棄却していることも指摘しておきたい⁴⁵⁾。第二のペリクレスの外交政策に関しても、ペリクレスの演説とプルタルコスの記述に共通する、海上支配による支配圏の拡大を目指す「帝国主義的レトリック」を我々は既に指摘した。また、もし遠征が黒海南岸に限定されたとすれば、ブラシンスキーも認める⁴⁶⁾ペリクレスの「立派な装備をほどこした大艦隊」がその力を誇示した相手は、カッパドキア人とパフラゴニア人の首長に限定されることになる。これに対してヴィノグラードフは、プルタルコスが述べている「王」でありえたのは、ポントス地域のバルバロイ世界の主要な構成要素である西岸のトラキア人のオドリュサイ族と北岸のスキュタイ人の支配者だけであると反論している⁴⁷⁾。第三の南岸から北岸への短航路の開拓時期に関しては、ヘロドトスの記述(IV 86)から、前述のテミスキュラとシンディケを結ぶ短航路は、既に前5世紀半ばにはギリシア人に知られていたと考えられる⁴⁸⁾。ペリクレスの長期間のアテナイ不在に対する疑問も、逆に、ペリクレス自身が9ヶ月間もサモス攻囲に取り組んだ後にその作戦を継続して、そのままポントスへ遠征したとするブラシンスキーの前提にとっては、むしろ不利であろう。

ブラシンスキーが挙げる第四の論拠は理論的な問題であり、より詳細な検討に値する。彼はペリクレスのポントス遠征の目的を、植民者や守備隊を置いて実質的に支配する領土の獲得に限定して考え、黒海北岸ではその可能性と必要性の双方を否定した。しかし、アテナイの帝国政策は多様であって、必ずしも軍事力の駐留による領土の獲得を伴うわけではなかった。ましてや、ペリクレスの遠征がアテナイのポントス進出の実質的に最初の試みであったとすれば、この場合も、まず大艦隊によってアテナイの力をポントス都市に宣伝して、彼らの海上同盟への加入を促し、その上で、貢租徴収の段階へ、さらに可能であれば、植民者や守備隊の派遣へ進む、というコースのほうがより現実的であろう。ペリクレスの遠征の目的を領土の獲得と直結すべきではない。

ペリクレスの遠征はボスポロスの支配者との衝突を招く危険性があった、というブラシンスキーのもう一つの主張を検証するために、我々はこの時期のボスポロス史に関する唯一の史料の検討に移ろう。ディオドロス(XII 31.1)によれば、ボスポロスでは、前480/79年から42年間アルカイアナクス家が統治した後、前438/7年にスパルタコス(スパルトコス)が支配権を握った。この政変がペリクレスのポントス遠征とほぼ同時に起こったことは、当然研究者の関心を引いた。二つの事件の順序に関して、ペリクレスの遠征が先行したと見る研究者の中には、ボスポロスの政変へのペリクレスの直接介入を想定し、スパルトコスはペリクレスの支援を受けて権力を握ったとみなす見解さえある⁴⁹⁾。しかし、アルカイアナクス家は、アテナイの支配圏に属するミレトスあるいはレスボスの出身であったと考えられており、アテナイに対して本質的に友好的なこの王朝を倒した後、自分たちがよく知らない、しかも、おそらくギリシア人でさえなかった男を、ペリクレスが戦略上重要な地域の統治者に就かせたとは考え難い。新し

い王朝の出現は、ペリクレスの遠征に先行して起こった、ボスポロスの内政問題であった⁵⁰⁾。

ボスポロスで起こった政変は、南岸のシノペ（あるいはアミソス）まで航行したペリクレスにとって、当然対応を迫られる重大事件であった。第一に、ボスポロスの新しい支配者がアテナイとの友好関係を維持する意図を持っているのかどうかを確認する。第二に、新しい支配者に反アテナイ的行動をとることに対して警告するために、アテナイの力を誇示する。第三に、可能であれば、ボスポロスにアテナイの橋頭堡を確保する。ペリクレスのボスポロスへの航行にはこのような重層的な目的が考えられる⁵¹⁾。さらに、第三の目的と関連して、ボスポロス西岸の都市ニュンファイオンがペリクレスの遠征の際にアテナイの支配圏に帰属した可能性が指摘されている⁵²⁾。ペリクレス艦隊がボスポロスへ航行し、新しい支配者にアテナイの力を誇示した可能性は、現在の史料状況では推測の域を出ない。しかし、ボスポロス王が国家の形成に着手したばかりで、まだボスポロス沿岸部にさえ強固な支配を確立するには至っていなかった時期には、アテナイがこの地域にも支配圏を拡げる可能性は十分にあったと考えられる。

次に問題となるのは、黒海北西岸の最も重要なポリス、オルビアである。前5世紀のオルビアの政治史に関しては、ヴィノグラードフの精力的な研究がある。特に、1989年に刊行されたオルビア政治史の総合的研究では、彼はアテナイの帝国支配とオルビアの関係について明確に論じている。

ヴィノグラードフはオルビアがアテナイ海上同盟に加入したことを認めるが、その最大の根拠は同盟諸市での通貨と度量衡の統一に関するアテナイ法、いわゆる「通貨・度量衡統一令」の「オデッサ断片」fragmentum Odessitanum と呼ばれる、9行の断片である（IG I³ 1453F）。同じ「通貨・度量衡統一令」を記した他の断片との比較から、この断片が、同盟市の役人にこの決議を石碑に刻んでアゴラおよび貨幣鑄造所の前に建立することを命じる条項と、アテナイ以外の貨幣・度量衡を使用した場合の罰金に関する規定を記していることは疑いない⁵³⁾。したがって、この碑文が建立された都市は、アテナイの支配圏に含まれたとみなさねばならない。

問題は、オデッサ国立考古学博物館に所蔵されていたが、1960年に公刊される直前に紛失して現在に残っていないこの断片がどこから出土したのかということである。問題の断片は1930年より前にオデッサ博物館に収蔵されたが、博物館の記録には、これが古代のオルビアの遺跡にあたる現代のパルティノ村で「購入された」とあり、正式な発掘によって「発見された」とは記されていない。このため、黒海北岸へのアテナイ支配圏の拡大に関わるあらゆる論拠を一掃しようとしたブラシンスキーは、これがエーゲ世界を含む他の地域から古美術品の集積地であった国際都市オデッサへ持ち込まれたものであって、オルビアから出土したものではない可能性を指摘した。しかし、ヴィノグラードフが説得的に証明したように、オデッサ博物館にある他の地域に由来する重要な収蔵品は19世紀に入手されたものであり、正確に目録化されている。したがって、「通貨・度量衡統一令」という重要史料に属することが認識されなかったため目録化が遅れた問題の断片が、パルティノ村から、すなわち古代のオルビアから出土したことを疑う理由はない⁵⁴⁾。我々は、ここにオルビアがアテナイの海上同盟に帰属したことを証明する決定的な証拠を得たことになる。

さらにヴィノグラードフは、「オデッサ断片」の文字の書体が、次に検討する「ティメシレ

オスへの市民権賦与決議」碑文の書体と正確に一致すること、すなわち、この断片が前5世紀の第3四半期に属することを指摘する。ここから彼は、オルビアの海上同盟加入は、前437年頃のポントス遠征のときにペリクレスがここを訪問した結果であると結論する⁵⁵⁾。しかし、「通貨・度量衡統一令」の成立年代に関しては、前450～前445年頃とする通説に対して、最近では、マッティンリが主張した前420年代説のほうに有利な新発見が指摘されているという⁵⁶⁾。オルビアの海上同盟加入の時期に関しては、この断片だけからの結論は控えるべきであろう。

ペリクレスのポントス遠征の問題の解明に対するヴィノグラードフの最大の功績は、プルタルコスの記事から知られるシノペの僭主ティメシレオスの名前が復元できる碑文をオルビアで発見したことである。シノペを追放された僭主ティメシレオスとその兄弟テオプロポスを受け入れ、彼らに市民権、免税特権および不動産取得権を賦与することを決定したオルビア人の決議であるとヴィノグラードフが解釈したこの碑文⁵⁷⁾に関しては、碑文学の権威ルイ・ロベールがその復元を支持して以来、細部に関する疑義はなお提起されているが、ティメシレオスの名前と彼に対する何らかの特権賦与は、確実とみなすことができる⁵⁸⁾。

しかし、ここで問題が生じる。ヴィノグラードフの解釈によれば、オルビアのアテナイ海上同盟への加盟と、アテナイによってシノペから追放された元僭主のオルビアへの亡命は、ペリクレスのポントス遠征の時に同時に起こったことになる。果たしてこれは矛盾しないであろうか。ヴィノグラードフは、ペリクレスは穀物供給源としてのオルビアとの友好関係を確保するほうを優先し、他方、既にシノペに拠点を確立したアテナイにとって元僭主はもはや脅威ではなくなったから、遠方の同盟国オルビアがティメシレオスを受け入れたのを、アテナイは見ても見ぬふりをするのができた、として自己の解釈を堅持する⁵⁹⁾。最近では、スリコフがより合理的に見える説明を提起している。スリコフはペリクレスの遠征のルートの問題にする。従来の説では、ペリクレスは黒海の南岸から北岸へ航行し、そこから西岸に沿ってトラキアのボスポロス海峡へ戻るというルートをとったとみなされ、本稿もそれに従ってきた。これに対してスリコフは、ペリクレスの艦隊は遠征の目的地である穀物供給源の北岸地方へ向けて西岸沿いに直行し、そこから南岸へ向かったという逆のルートを想定する。この場合、ペリクレスのオルビア訪問はシノペ事件に先行することになり、ペリクレスが再度オルビアへ戻ってくることは予想されないから、オルビアはアテナイの干渉を恐れることなくティメシレオスの亡命を受け入れるのができた、とスリコフは考える⁶⁰⁾。

二つの解釈は論理的にはどちらも可能であるが、ペリクレスの遠征とオルビアによるティメシレオスへの特権賦与とを因果的に関係づける、両者に共通する前提そのものを疑問視する別の有力な解釈がデュボアとブラウンドによって提起された。それによれば、問題の碑文は、「亡命者」ティメシレオスの受入れについては何も語っておらず、小アジアの僭主の亡命先としては、アテナイの同盟国となったオルビアよりも、ペルシアのほうがはるかに分り易い。また、かなり大きな良質の大理石の板に丁寧に刻まれ、おそらく決議の文面の上部に何らかのレリーフ装飾を伴った碑文の外観は通常のものではない。この碑文からは、シノペの僭主ティメシレオスが黒海地域で大きな力を有している時期に、交易を通して古くからシノペと密接な関係にあったオルビアが、通常の免税特権に加えて市民権と不動産取得権という盛大な特権の賦

与で顕彰したことを読み取るべきである。したがって、この碑文は、ペリクレスの遠征とティメシレオスの追放が起きた前437年頃よりも少し前の時期に年代決定されるべきである⁶¹⁾。この解釈は非常に説得的であり、我々もこれに従いたい。

我々は「通貨・度量衡統一令」の「オデッサ断片」から、アテナイの支配圏がオルビアに及んでいたことを認めることができた。しかし、ペリクレスの遠征とオルビアの海上同盟加入とを関連づける有力な状況証拠と目された「ティメシレオスへの市民権賦与決議」は、ペリクレスの遠征とは別の文脈の中で解釈すべきであり、ティメシレオスのオルビアへの亡命、さらに彼を受け入れたオルビアの僭主政的国制に関するヴィノグラードフの見解に対しては、より慎重な判断を下さざるを得ない。

本章では、ペリクレスのポントス遠征は、海上同盟の盟主として、トラキアのボスポロス海峡地域に限定された局地的課題への対応だけでなく、より広範な課題の解決を目指す、熟慮された戦略であったという視点から、黒海の南岸と北岸について遠征の状況を再構成してきた。黒海西岸に関しては、直接的な史料はないが、ペリクレスの遠征が北岸にも及んだとすれば、艦隊がどのコースを取ったにせよ、イストロス、トミス、メサンプリア、アポロニアなどの西岸都市への寄航は当然想定できるであろう⁶²⁾。

結果的には、我々はこれまでの議論を乗り越えるような決定的な史料を見出すことはできず、依然として論証よりも理念のほうが先行したことは、率直に認めねばならない。ペリクレスの遠征と直接結びつけることができるアテナイの軍事的影響力は、結局、黒海南岸のシノペと、おそらくアミソスに確認できるだけであった。ペリクレスの遠征は領土の獲得や貢租の徴収を目的とするものではなかったと見るべきであろう。しかし、プルタルコスが述べているように(Plut. *Per.* 20. 1)、ポントス諸ポリスに「依頼された事柄」を果たしてやることによって、「どこへでも欲する所に航行して全海域を支配する」アテナイの海軍の力を宣伝したこの遠征の結果、アテナイは黒海全体の制海権を事実上掌握したと考えられる。ペリクレスのポントス遠征は、10年ほど後にアテナイがこの地域でも同盟国の拡大と貢租の徴集という同盟政策の新たな段階に着手するための重要な前段階であったと言えよう。

第3章 前420年代のアテナイのポントス政策

第1節 前425/4年の貢租査定

前431年にペロポネソス戦争が始まると、アテナイは黒海からの穀物供給ルートの統制を通して、一方では、自国への食糧の安定供給を確保するとともに、他方では、同じく黒海の穀物に依存している同盟国への締め付けも図った。

それを裏づける一つの証拠として、ビュザンティオンに拠点を持つ「ヘレスポントス監査官」Hellespontophylakes の設置が挙げられる。史料上、その役割が最初に証明されるのは、エーゲ海北岸の同盟国メトネに関する民会決議を記録した碑文に含まれる、前426/5年の「クレオニュモスの決議」である(IG I³ 61, ll. 34-41)。それによれば、メトネ人は、ビュザンテ

イオンから一年ごとに定められた量の穀物（数千メディムノスの規模であるが、数字は欠けている）を搬出する権利を有し、ヘレスポントス監査官によって輸送への妨害行為から守られることが保証されたが、同時に、メトネ側は穀物搬出に関してヘレスポントス監査官に文書で届け出ることが義務づけられた。ビュザンティオンの戦略上の位置を考慮すれば、ヘレスポントス監査官の設置には、ヘレスポントス海峡だけでなく、より先の黒海に対する海上支配を目指すアテナイの意図を見ることができる⁶³⁾。

次に問題になるのは、前425/4年に行なわれたアテナイ海上同盟の貢租の再査定である。ピュロスおよびスファクテリア攻防戦でのスパルタ軍に対する勝利（Thuc. IV 26-41）という高揚した雰囲気の下、アテナイ民会は同盟国から徴収する貢租を増額するために再査定を行なう決議を採択した⁶⁴⁾。この「トゥディッポスの決議」を記録した碑文の断片（IG I³ 71, IV, 11. 126-172）に、我々が知る限りでは、初めてポントスの都市からの貢租徴収の事実が確認できる。

再査定の目的は明確である。民会によって任命された10人の査定官は査定対象都市のリストを作成し、暫定の査定額を定めるが、特別の場合を除いて以前よりも低い額を査定してはならないというのが原則であった。査定を通告された同盟国がその額について不服がある場合は、定められた期限までにアテナイの1000人の特別法廷で申し立てをすることが認められているが、最終決定はこの特別法廷と評議会に委ねられた。貢租の総額は、ペロポネソス戦争開戦前が約500タラント、前428年が約800タラントと推定されるのに対して、新しい査定では1460タラント以上に増額された。また、貢租支払い国の数についても、開戦前には最大180であったのに対して、380以上、おそらく400以上に増加した⁶⁵⁾。

碑文には決議の下の部分に、査定された都市の名前とその査定額が徴税区ごとに記されているが、我々にとって重要なのは、碑文の最後の部分にあたる第IV列の126行から172行である。この部分は破損が著しく、復元は困難を極める。問題は、黒海沿岸の同盟国からなる「エウクセイノス区」という独立した徴税区が存在したのかどうか、そして貢租を査定された同盟国の範囲とその査定額をどのように評価するか、ということである。

第IV列126行には、EKTOEの5文字が残っている。この箇所の復元をめぐるのは、1930年代から50年代にかけて、二つの解釈が提起されてきた。これに関する複雑な研究史は、シェロフ=コヴェジャエフによって適切に整理されている⁶⁶⁾。それによれば、1934年にメリットとウェストは、E（イプシロン）の後の文字の痕跡がΥ（ユプシロン）と読めるとみなして、この箇所に[πόλες] ἐκ τῶ Εὐ[χσεῖνο]（「エウクセイノスの諸ポリス」）という復元を提起した。独立した徴税区として「エウクセイノス区」の存在を認めるこの解釈は、『アテナイ貢租表』の編者たちに継承された⁶⁷⁾。これに対して、1935年にメリットとウェストを批判したジェベリョフ（S. A. Zhebelyov）の見解を継承したブラシンスキーは、1955年にまったく別の復元案を提起した。彼は、Eの後の文字の僅かな痕跡はΥと読めない、早い時期には「エウクセイノス」を単独で黒海の地域概念として用いる例はない、全ての徴税区への使節の派遣が述べられた碑文でも「エウクセイノス区」は言及されない、など多数の論拠を挙げてこの復元に反対した。彼は、Eの後の文字をΣ（シグマ）と読み、この箇所を[φόρος] ἐκ τῶ ἐσ

[χάτο τῆς ἀρχῆς] (「^{アルケ}支配領域の辺境部からの貢租」) もしくは, [φόρος] ἐκ τοῦ ἐσ[χάτο τῆς Θράικης] (「トラキア区の辺境部からの貢租」) と復元することを提起した。第2章でもたびたび指摘したように, アテナイの支配領域を黒海南岸に限定し, 北岸へのアテナイの進出を否定するブラシンスキーは, 碑文のこの箇所を既存の五つの徴税区に含まれない辺境部の同盟国を記載した, 貢租表の「付け足し」と解釈し, 126行のすぐ後に続くヘラクレイアとアポロニアがトラキア方面での支配領域の境界を示すと考えた⁶⁸⁾。

このブラシンスキーの復元は, 1958年にルイ・ロベールによって説得的ではないとみなされ, その後も批判的に論及されてきた⁶⁹⁾。シェロフ=コヴェジャエフはブラシンスキーの論拠を詳細に批判した。石碑の全面的な視覚的分析に基づいて E の後に T を認めたメリットらの読みは信頼できる。「エスカトン」ἐσχάτου という名詞を「辺境部」という空間的な説明要素として用いた例はない。ヘラクレイアとアポロニアのすぐ後にも別の都市が続くから, これら二つの都市をアテナイの支配領域の境界とみなすことはできない⁷⁰⁾。ブラシンスキーの主な論拠に対するこうした批判は説得的であると思われる。

我々が持っている最も新しい碑文集である *IG* 第1巻第3版も含めて, 現在では, メリットらの復元を確実なものとしてテキストに採用し, ブラシンスキーの復元を批判的に注記するのが一般的である。さらに, *IG* 第1巻第3版では, 前421/0年の貢租表 (*IG* I³ 285, l. 78) と, 同じく前410/09年の査定表 (*IG* I³ 100, fr. 8) に, 貢租徴収区としての「エウクセイノス区」が復元されている。なお, 前428/7年の査定に黒海都市からの貢租支払いが記録された可能性を指摘する見解もあるが⁷¹⁾, 確証はない。我々は前425/4年の査定で, 「エウクセイノス区」は初めて組織されたと考えて考察を進める。

第2節 貢租徴収の努力

「エウクセイノスの諸ポリス」(126行) の見出しの下には, 44行に匹敵するスペースがある。127行の [ἡερ]ακλειῶτα[ι] (ヘラクレイア) と128行の [Ἀπολ]λονία (アポロニア) の復元は確実である。残りの部分では1~3文字が判読できる13の同盟国の名前と, 21の査定額が考察の対象となりうる。ここでは, *IG* I³ 71のテキスト, コペンハーゲン・ポリス・センターから刊行されたポリスの目録⁷²⁾, そしてタルバートが編集した最も新しい歴史地図⁷³⁾の三つの資料に基づいて, 前425/4年の貢租査定表に復元されるポントスの同盟国の地理的分布を整理してみる。

南岸では, ヘラクレイアその他, 129行に [Κάρο]σα (カルーサ), 169行に Κερ[ασῶς] (ケラスス) が復元可能である。カルーサはシノペの近くに位置する交易港であり⁷⁴⁾, ケラススは, トラペズスから西へ3日の行程にある (*Xen. Anab.* V 3. 2), シノペに貢税を払う従属植民市であった (*Xen. Anab.* V 5. 10)⁷⁵⁾。これらはシノペの二次植民市であり, シノペに (そして, おそらくアミソスにも) 植民したアテナイがさらに東方へ支配圏を拡大したことを示唆するであろう。

西岸では, アポロニア (現在のブルガリアのソゾポル) の他, 143行に, 2タラントンの貢租を査定された同盟国として Νι[φσα] (ニプサ) の名が復元される。ただし, アポロニアと

メサンプリアの間のトラキア種族ニブサイオイ族 (Hdt. IV 93) の地にあったとされるニブサの都市の名称自体は、後代の史料で確認できるだけである⁷⁶⁾。また、162行で1タラントンの貢租を査定された O[—] については、ここにオルビアを復元することは魅力的であるが、オルビアよりも小さなポリスがもっと大きな額を査定されているのと比較すると、1タラントンという小さな査定額はオルビアの重要性に合致しないとする批判もある。最近では、この箇所にはドナウ川河口のミレトス植民市イストロスがその近くに建設した小さな二次植民市である、オルガメを復元する案のほうが有力と言える⁷⁷⁾。この他、160行の1タラントンを査定された T[—] にトミス、161行の2タラントンを査定された M[—] にメサンプリアを復元する可能性もあるが、いずれも確実とは言えない。

北西岸には比較的多数の同盟国が復元される。そのうち、163行で2タラントンを査定された Tύ[ρας] または Tv[ραυόλ] (テュラス)、167行で3000ドラクマ (=0.5タラントン) を査定された Νικ[ονία] または Νικ[ονεόν] (ニコニオン) の復元は、ほぼ確実である。これらはともにドニエストル川の河口に建設されたミレトス植民市である⁷⁸⁾。165行で3000ドラクマを査定された Κα[ρκινίτις] (カルキニティス) の復元もかなり有望である。ここに黒海西岸の Κα[λλάτις] (カラティス) を復元する案も提起されているが、同盟国リストの地理的配列からは、クリミア半島西岸のカルキニティスのほうをとるべきであろう⁷⁹⁾。また164行で、1タラントンを査定された Τα[μυράκε] (タミュラケ) については、古典古代の伝承では、オルビアの影響圏に含まれる「アキレウスの競走場」という神域の東方に位置する岬・半島として言及されるだけで (Strabo VII 3. 19)、ポリスとしては証明されていない⁸⁰⁾。最後に、170行に復元される Δα[νδάκε] (ダングケ) は、クリミア半島南西岸のケルソネソスに近い位置が推定されているが、詳細な不明である⁸¹⁾。

ボスポロス沿岸では、166行で3000ドラクマに査定された Κιμ[μερι—] (「キンメリ…」) と、168行で同じく3000ドラクマに査定された Πατ[ρασύς] (パトラシユス) が問題となる。「キンメリ…」は、キンメリア人と関係するボスポロスに固有の地名であり、ボスポロス西岸のキンメリコン (または東岸のキンメリス) を復元する可能性は高い⁸²⁾。ボスポロス東岸に位置づけられるパトラシユスについては、詳細は不明であるが、これもボスポロスに固有な珍しい地名であると言われる⁸³⁾。

「エウクセイノス区」の構成について現存断片で判断できる限りでは、南岸の他、北西岸のオルビアとイストロスの間の地域に同盟国が集中する傾向が見て取れる。他方では、たしかに1～3文字からの復元ではあるが、東岸を除く黒海沿岸のほぼ全域で何らかの同盟国の存在を推測することができる。概して、有力ポリスは少なく、組織的な海上支配というよりも、ポリスと呼べるかどうかとも確実ではない雑多な国家が個別的にアテナイの支配圏に組み込まれた印象が強い。

貢租の額については、復元も含めて確認できる数字は、4タラントンが1例、2タラントンが9例、1タラントンが7例、0.5タラントンが4例である。おそらく、総額は100タラントン以下、場合によっては50タラントン程度の可能性さえ指摘される⁸⁴⁾。これを前述した1460タラントン以上という全徴税区からの査定総額と比較すれば、アテナイは戦争遂行の資金調達を

「エウクセイノス区」からの貢租に賭けたとは言えないであろう。

では、アテナイはポントスにおいて同盟国を増やし、そこから貢租を徴収することに本気ではなかったのでしょうか。考慮すべき要点は次の三つである。第一に、有力な同盟国を欠く遠方の地域では、さほど大きな都市でなくとも、その地域における一定の拠点の確保が持つ戦略的な意義は過小評価すべきではない⁸⁵⁾。第二に、我々が想定したように、これが最初の本格的な査定であったとすれば、純粹に名目的な貢租であったとしても、貢租を支払う義務は同盟国にアテナイへの従属を実感させる大きな象徴的意義を持ったであろう⁸⁶⁾。第三に、アテナイは滞納貢租の徴収のために艦隊を派遣さえしたが、その具体例が黒海南岸のヘラクレイアに関係しているのである。

トゥキュディデス (IV 75) は、前424年にラマコスが滞納されている貢租を徴収するために10隻の艦船を率いて黒海を航行した事実を伝えている。このラマコスは、前437年頃のペリクレスのポントス遠征に参加した指揮官と同一人物である。今回ラマコスは、ヘラクレイア領内のカレス川の河口に停泊していたときに、突然の洪水に襲われて艦船を喪失してしまい、やむなく徒歩でビテュニアを通り抜けてカルケドンへ撤退したと報じられている。この事件に関してユスティヌスは、おそらくヘラクレイアの歴史家ニュンフィスに依拠して、より詳細に叙述している。それによれば、アテナイが貢租を課したとき、他の国々が「自分の安全の保護を求めて」貢租を納めたのに対して、ヘラクレイアだけは「ペルシアの王たちとの友邦関係の故に」、支払いを拒んだ。貢租を取り立てるため派遣されたラマコスが船を岸に残してヘラクレイアの畑を荒らしている間に、突然の嵐で船が難破し、彼は大部分の軍隊と船を失った。このため海から帰ることができず、また僅かな勢力では獰猛な種族の間を陸から帰ることもできずにいたが、ヘラクレイア人たちはこれを「復讐の機会より、むしろ恩恵を施す絶好の機会だ」と考えて、アテナイ人に糧食を持たせ、援軍をつけて送り出した (Iustinus XVI 3. 9-12)⁸⁷⁾。

ユスティヌスの記述からは、黒海南岸のポリスに対してペルシアがなお隠然たる影響力を持っていたことがわかる。ペルシアの支援を後ろ盾にしたアテナイへの反抗は、ペリクレスの遠征の際のシノペの僭主ティメシレオスの場合にもあてはまるであろう⁸⁸⁾。他方でユスティヌスは、ヘラクレイアには、苦境にあるラマコス軍を援助することによってアテナイとの関係強化を図ろうとする一派が存在したことも伝えている。実際、アテナイは同じ前424/3年に、ヘラクレイアの有力者ソティモスとその子孫を、アテナイ人にとっての「善行者」として顕彰し、ヘラクレイアにおけるアテナイの「^{プロクセノス}権益代表」に任命している (IG I³ 74)。おそらく、この二つの事件は無関係ではあるまい⁸⁹⁾。

ヘラクレイアの例が明確に示すように、アテナイは、ペリクレスの遠征に始まる海軍力の宣伝と誇示によって実現された黒海全域の海上支配と、同盟市の「親アテナイ派」の有力者との個別的な関係の強化という二つの方法を使って、前420年代には、ポントスでも本格的に帝国支配を目指したと考えるべきであろう。

おわりに

我々が持っている史料は著しく限定されるため、これまでの研究に内在していた、論証よりも理念が先行する傾向から完全に脱却することはできなかったが、本稿では、前430年代から前420年代を通してのアテナイのポントス政策に関して、一定の見通しを提示しえたであろう。

ブルタルコスが伝える前437年頃のペリクレスのポントス遠征は、アテナイと黒海沿岸ギリシア都市との関係の新しい時代の幕開きを告げる事件であった。他の挑戦を許さない圧倒的なアテナイの海軍力をギリシア都市に対しては宣伝し、バルバロイに対してはそれを誇示することによって、この遠征は、事実上黒海全体に及ぶ海上支配を打ち立てる可能性を開いた。その基盤の上にアテナイは前420年代、ビュザンティオンにヘレスポントス監査官を設置して穀物交易を統制し、さらにペロポネソス戦争の資金確保のための政策の一環として、前425/4年の貢租再査定では、黒海のほぼ全域を含む「エウクセイノス区」を組織して、同盟国からの貢租徴収という本格的な帝国支配を企てた。これが本稿の結論である。

しかしながら、ペロポネソス戦争の後半、特に前413年にシチリアでアテナイ艦隊が壊滅した後の戦局は、ポントスでの帝国支配のそれ以上の展開を許さなかった。この時期のポントスの状況については、史料はさらに少ない。前410年、アルキビアデスは、軍資金調達のため、それまでの貢租徴収ではなく、ビュザンティオンの対岸にあるクリュソポリスに税関を設置し、ポントスから出ようとする船舶から「十分の一税」を徴収する政策を開始し、一定の収入の確保を試みた (Xen. *Hell.* I 2. 22)。前405年のアイゴスポタモイの海戦の後、スパルタのリュサンドロスは黒海地域のアテナイ人を本国へ強制的に帰還させる戦略をとった (Xen. *Hell.* II 2. 2)。史料で確認できる限りでは最後までアテナイの支配圏にとどまったと考えられるボスポロスの都市ニュンファイオンも、前405年頃までに放棄されたらしい⁹⁰⁾。結局、前404年、アテナイの敗北とともに、ペリクレスの遠征以来30年ほどにわたって試みられた、ポントスにおけるアテナイの帝国支配も潰えることになった。

しかし、前5世紀後半のポントス政策の展開は、アテナイ社会に少なからざる刻印を残した。前420年代のアテナイの文学作品には、アテナイとポントスとの関係の緊密化を示唆するいくつかの証言が見出される。前424年頃に書かれた伝クセノフォン『アテナイ人の国制』(II 7)は、海の支配から得られる利益を論じる箇所、アテナイ民主政によって搾取される地域の一つに、シチリアやエジプトなどと並んで、ポントスを挙げている。また、アリストファネスの喜劇には、ポントスとの関わりの深い政治家が登場する。前425年に上演された『アカルナイの人々』では、ペリクレスの遠征と前424年の遠征でシノペおよびヘラクレイアと深く関わったラマコスが、おそらく前424年の遠征の失敗のゆえに揶揄されている (1071, 1080行)。また前424年に上演された『騎士』の登場人物の「パフラゴニア人」は、政治家クレオンに擬されている (919, 976行)。クレオンは黒海南岸、特にシノペと深い関係を持っていたのかもしれない⁹¹⁾。

ペリクレスの遠征以後、アテナイ社会にはポントスへの新たな関心が生まれたと考えられる。

しかし、この問題の全面的な解明は現在の筆者の力の及ばないところであり、今後の課題としたい。

註

- 1) ギリシア人は黒海を「ポントス・エウクセイノス」Pontos Euxeinosと呼んだ。そして「海」を意味する「ポントス」という語は、「客あしらいの良し」という意味の形容詞「エウクセイノス」なしで、固有名詞として黒海を意味するようになった。本稿では、ポントスを黒海と同義語として使用する。
- 2) 篠崎 (2), 509-514頁。
- 3) I. E. スリコフの表現 (Surikov, 342) を借用する。
- 4) この問題に関する欧米の研究の概観に関しては, Surikov, 341-342 参照。本稿では、主にメグズの研究 (Meiggs, 175-204, 324-339) を取り上げる。
- 5) Brashinskij (1); Brashinskij (2). ブラシンスキーの見解の影響力については, Braund, 202, n. 19 and n. 23 参照。なお、ブラシンスキーには1963年に出版された『前6～前2世紀のアテナイと黒海北岸地方』と題するモノグラフ (И. Б. Брашинский, Афины и Северное Причерноморье в VI-II вв. до н. э., Москва 1963) があるが、参照できなかった。
- 6) Vinogradov (2), 126-134. 80年代初期のヴィノグラードフの研究については、篠崎 (1) 参照。ロシアを代表するこの古代史家の主要な論考は, J. G. Vinogradov, *Pontische Studien. Kleine Schriften zur Geschichte und Epigraphik des Schwarzmeerraumes*, Mainz 1997 で読むことができる。残念ながら、彼は2000年5月に53歳の若さで急逝した。
- 7) Shelov-Kovedyaev, 89-124.
- 8) 本稿では特に、Surikov と Braund から多くを学んだ。
- 9) もう一つの史料であるアイスキネス『クテシフォン弾劾』171-172節の解釈と関わる、前5世紀末のポントス政策の破綻については、別稿「アテナイと初期ボスポロス王国」『東海史学』第42号、2008年で論じる。
- 10) 『ペリクレス伝』の翻訳は、馬場恵二氏の訳 (村川堅太郎編『プルタルコス』筑摩書房、1966年、所収) を借用させていただく。
- 11) Surikov, 343-344; Braund, 81.
- 12) Stadter, 217.
- 13) 艦隊の規模は曖昧であるが、13隻がラマコスとともにシノペに残された事実は、全体で50隻ほどの艦隊を示唆すると考えられる (Stadter, 218)。
- 14) Ferrarese, 9-12, 16-19.
- 15) Vinogradov (1), 67-68; Angelescu, 48; Surikov, 346-348.
- 16) Mattingly, 152-156.
- 17) Mattingly, 157.
- 18) Surikov, 366, n. 86; Braund, 201, n. 10.
- 19) Tsetskhladze, 461, 466.
- 20) Tsetskhladze, 463-464. ツェツフラーゼは、黒海交易を論じた別の論考でも、前5世紀におけるアテナイの黒海との穀物交易について否定的な評価をくだしており、その際、マッティンリの上述の結論と自己の結論との類似を強調している。G. R. Tsetskhladze, *Trade on the Black Sea in the archaic and classical periods: some observations*, in H. Parkins and C. Smith (eds.), *Trade, Traders and the Ancient City*, London/New York 1998, 56-57 and n.1.
- 21) Vinogradov (1), 67-68; Surikov, 345-346.
- 22) H. B. Mattingly, *The Athenian Empire Restored*, Ann Arbor 1996, 149-150; Surikov, 346; Braund, 81. なお、トゥキディデスについては、久保正彰氏の訳 (トゥキディデス『戦

- 史』全3冊, 岩波文庫, 1966-1967年) を借用させていただく。
- 23) Braund, 200, n. 2.
 - 24) アテナイのエジプト干渉政策とその破綻については, Meiggs, 100-108; Surikov, 350; Stadter, 220 参照。
 - 25) 南イタリアとシチリアでのアテナイの外交政策については, Surikov, 350-352; Stadter, 221 参照。
 - 26) Meiggs, 195, 198; Braund, 82-83.
 - 27) サモス戦争については, Meiggs, 188-194 が詳しい。
 - 28) ビュザンティオンの離反がもたらした穀物供給への不安とペリクレスのポントス遠征との直接的関係を強調する点では, 我々はブラシンスキーに同意できる (Brashinskij (2), 115). M. アンゲレスクは, ビュザンティオンの離反が誘発しかねない他の同盟国の離反への不安をペリクレスの遠征の原因とみなす (Angelescu, 47, 50).
 - 29) Meiggs, 199.
 - 30) Hind, 491 (前438～前436年頃); Vinogradov (1), 65-67 (前437～前436年); Surikov, 349 (前437～前436年); Braund, 82-83 (前437年頃); Anochin, 37 (前437年).
 - 31) Brashinskij (2), 113-114.
 - 32) Anochin, 37.
 - 33) Braund, 81.
 - 34) Surikov, 354; Hind, 489.
 - 35) Surikov, 354-355.
 - 36) Braund, 81 and 201, n. 8. マッティンリはこの断片の年代を前425年頃に置き換え, 前424年夏のラマコスの遠征と関連づけるが (Mattingly, 152, n. 5), ラマコスがこの遠征でシノペまで航行したとする彼の想定には根拠がない。
 - 37) Ferrarese, 11-12; Mattingly, 154-155.
 - 38) Surikov, 347-348; Braund, 201, n. 10.
 - 39) ストラボンのテキストは, この部分で1語ないし数語欠落がある。括弧内は引用者(篠崎)の補いである。
 - 40) Mattingly, 153-155.
 - 41) Meiggs, 198-199.
 - 42) Surikov, 355; Braund, 82.
 - 43) Brashinskij (2), 120. cf. Brashinskij (1), 151.
 - 44) Brashinskij (2), 116-120.
 - 45) Brashinskij (1), 152.
 - 46) Brashinskij (2), 118, 120.
 - 47) Vinogradov (2), 128. cf. Hind, 492.
 - 48) Vinogradov (2), 132; Surikov, 354-355.
 - 49) 最近では, アノヒンが, スパルトコス(貨幣史料から知られるオドリュサイ王族の一人スパラドコスと同一人物であり, ペリクレスによってボスポロスの支配者に拔擢され, ポントス遠征に最初から同行していた, という大胆な仮説を展開している (Anochin, 40-43).
 - 50) Shelov-Kovedyaev, 82-87; Surikov, 356-357.
 - 51) Surikov, 357-358; Braund, 85-86.
 - 52) Surikov, 358-360; Braund, 85; Anochin, 39. これに対してブラシンスキーはニュンファイオンがアテナイの支配圏に入ったことを明確に否定する (Brashinskij (1), 155).
 - 53) 「オデッサ断片」については, E. Erxleben, *Das Münzgesetz des delisch-attischen Seebundes, Archiv für Papyrusforschung und Verwandte Gebiete*, 19 (1969), 93-94, 121-123 が詳しい。

- 54) Vinogradov (2), 129; Dubois, 17-19; Braund, 85 and 202-203, n. 23.
- 55) Vinogradov (2), 129; cf. Dubois, 19.
- 56) 師尾晶子「デロス同盟と碑文研究」『歴史評論』667号, 2005年, 68-70頁.
- 57) 碑文のテキストは SEG XXXI 701; Dubois, 15, No. 5. ヴィノグラードフによるこの碑文の復元と解釈に関しては, 篠崎 (1), 5-7頁参照.
- 58) J. et L. Robert, *REG*, 95 (1982), 356-357, No. 235. cf. Braund, 202, n. 17. ヴィノグラードフに対する批判とそれに対するヴィノグラードフの反論は, Vinogradov (2), 109-110, n. 123.
- 59) Vinogradov (2), 127.
- 60) Surikov, 364-366. スリコフは当該論考執筆中に, 遠征ルートに関して「ヴィノグラードフも既にこの結論に達したことを知った」と注記している (Surikov, 364, n. 83).
- 61) Dubois, 16; Braund, 83-84.
- 62) 西岸の都市のうちイストロスとアポロニアについては, アリストテレスが寡頭政から民主政への転換を惹き起こす内乱が起こったことを伝えている (*Arist. Pol.* 1305b1-12; 1306a6-9). この国制の変化をペリクレスの遠征と, あるいは, これらの都市の海上同盟への加盟と結びつける見解がある. Avram, 196, n. 24; Avram et al., 931, 933.
- 63) Meiggs and Lewis, 176-180, No. 65; Braund, 89.
- 64) Meiggs, 324.
- 65) Meiggs, 324-325, 327-328.
- 66) Shelov-Kovedyaev, 90-105.
- 67) Shelov-Kovedyaev, 91-92, 96; B. D. Meritt and A. B. West, *The Athenian Assessment of 425 B. C.*, Ann Arbor 1934, 26, 68; B. D. Meritt, H. T. Wade-Gery and M. F. McGregor, *The Athenian Tribute Lists*, I, Cambridge (Mass.) 1939, 154-157, 528.
- 68) Shelov-Kovedyaev, 92-93, 97-98; Brashinskij (1), 148-151, 152-153.
- 69) J. et L. Robert, *REG*, 71 (1958), 226-227, No. 173; Meiggs, 328, n. 5.
- 70) Shelov-Kovedyaev, 101-103.
- 71) Meiggs and Lewis, 194. cf. Meiggs, 328.
- 72) Avram et al., 928-964.
- 73) R. J. A. Talbert (ed.), *Barrington Atlas of the Greek and Roman World*, Princeton/Oxford 2000. 以下, *Barrington* と略記し, それぞれの都市に, 地図の番号 (Map) と地図上のグリッド (Grid) を記載する. なお, Meiggs, *The Athenian Empire* の巻末に付された Map I (VI). The Euxine District は, 前425/4年に貢租を査定されたポントス都市を, 推定も含めて全て記載している.
- 74) Karousa: Avram et al., 958; *Barrington*, Map 87, Grid A3.
- 75) Kerasous: Avram et al., 958; *Barrington*, Map 87, Grid D4.
- 76) Steph. Byz. s. v. Νέψα.
- 77) デュボア (Dubois, 19) とブラウンド (Braund, 85) は, オルビアの復元を支持し, アヴラム (Avram, 197-198) とスリコフ (Surikov, 363-364) は, オルガメの復元を採用する. オルガメ (Orgame) については, Avram et al., 940 参照. *Barrington*, Map 22, Grid F4 にあるアルガムム (Argamum) が, オルガメのラテン語の名称である.
- 78) Tyras: Avram et al., 941; *Barrington*, Map 23, Grid D2. Nikonion: Avram et al., 935-936; *Barrington*, Map 23, Grid D2.
- 79) Karkinitis: Avram et al., 945-946; *Barrington*, Map 23, Grid G2. カラティスの復元の可能性については, Avram, 196-197 参照.
- 80) Tamyrake: Avram et al., 930. なおタミュラケ湾 (Tamyrakes Kolpos) が, *Barrington*, Map 23, Grid G3 に記載されている.

- 81) *RE*, 8 (1901), col. 2099, s. v. Dandake.
- 82) Kimmerikon: Avram et al., 946-947; *Barrington*, Map 87inset, Grid K2.
- 83) Patrasys: *Barrington*, Map 87inset, Grid L2. cf. Braund, 86; Anochin, 36. なお、ストラボン (XII 2. 8) はボスポロス東岸にあるパトラエウス (Patraeus) という村落に言及しており、碑文のパトラシユスと同一と考えられる。
- 84) Meiggs, 328.
- 85) Avram, 195.
- 86) Surikov, 363, n. 79.
- 87) ユスティヌスについては、ポンペイウス・トログス／ユニアヌス・ユスティヌス抄録『地中海世界史』京都大学学術出版会、1998年の合阪學氏の訳文を借用させていただく。
- 88) Braund, 87-88.
- 89) Braund, 88.
- 90) 前5世紀末のアテナイのポントス政策の破綻については、Hind, 492-493 を参照。
- 91) ブラウンドの論考の後半部 (Braund, 90-98) は、ペリクレスのポントス遠征がアテナイ社会に与えた衝撃と、そこから生まれたポントスに関する言説を、主に、アッティカ喜劇の断片史料に基づいて論じている。

参考文献とその略称

- Angelescu = M. Angelescu, Un problème controversé: L'expédition de Périclès dans le Pont Euxin, *Pontica*, 25 (1992), 45-54.
- Anochin = V. A. Anochin, Die Pontische Expedition des Perikles und der Kimmerische Bosporos (437 v. Chr.), in U. Peter (ed.), *stephanos nomismatikos: Edith Schönerdt-Geiss zum 65. Geburtstag*, Berlin 1998, 33-43.
- Avram = A. Avram, *Poleis und Nicht-Poleis im Ersten und Zweiten Attischen Seebund*, in M. H. Hansen and K. Raaflaub (eds.), *Studies in the Ancient Greek Polis*, Stuttgart 1995, 191-200.
- Avram et al. = A. Avram, J. Hind and G. Tsetschladze, The Black Sea Area, in M. H. Hansen and T. H. Nielsen (eds.), *An Inventory of Archaic and Classical Poleis*, Oxford 2004, 924-973.
- Brashinskij (1) = И. Б. Брашинский, К вопросу о положении Нимфея во второй половине V в. до н. э., ВДИ 1955, № 2, 148-161. (I. B. ブラシンスキー「前5世紀後半におけるニュンファイオンの状況の問題について」『古代史通報』1955年, 第2号, 148-161頁.)
- Brashinskij (2) = И. Б. Брашинский, Понтийская экспедиция Перикла, ВДИ 1958, № 3, 110-121. (I. B. ブラシンスキー「ペリクレスのポントス遠征」『古代史通報』1958年, 第3号, 110-121頁.)
- Braund = D. Braund, Pericles, Cleon and the Pontus: The Black Sea in Athens c.440-421, in D. Braund (ed.), *Scythians and Greeks: Cultural Interactions in Scythia, Athens and the Early Roman Empire (sixth century BC-first century AD)*, Exeter 2005, 80-99 and 200-206 (notes).
- Dubois = L. Dubois, *Inscriptions Grecques Dialectales d'Olbia du Pont*, Genève 1996.
- Ferrarese = P. Ferrarese, La spedizione di Pericle nel Ponto Eusino, in *Contributi dell' Istituto di storia antica*, vol. 2, Milano 1974, 7-19.
- Hind = J. Hind, The Bosporan Kingdom, in *The Cambridge Ancient History*, second ed., vol. VI, Cambridge 1994, 476-511.
- Mattingly = H. B. Mattingly, Athens and the Black Sea in the Fifth Century BC, in O. Lordkipanidzé et P. Lévêque (eds.), *Sur les traces des Argonautes: Actes du 6e symposium*

- de Vani (Colchide) 22-29 septembre 1990*, Paris 1996, 151-157.
- Meiggs = R. Meiggs, *The Athenian Empire*, Oxford 1972.
- Meiggs and Lewis = R. Meiggs and D. Lewis (eds.), *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.*, revised ed., Oxford 1988.
- Shelov-Kovedyaev = Ф. В. Шелов-Коведяев, История Боспора в VI-IV вв. до н. э., Древнейшие Государства на Территории СССР. Материалы и Исследования 1984 год, Москва 1985, 5-187. (F. V. シェロフ=コヴェジャエフ「前6～前4世紀のボスポロスの歴史」『ソ連邦の領域の古代国家—資料と研究 1984年』モスクワ, 1985年, 5-187頁.)
- Stadter = P. A. Stadter, *A Commentary on Plutarch's Pericles*, Chapel Hill/London 1989.
- Surikov = I. E. Surikov, Historico-Geographical Questions Connected with Pericles' Pontic Expedition, *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia*, 7 (2001), 341-366.
- Tsetskhladze = G. R. Tsetskhladze, Plutarch, Pericles and Pontus: Some Thoughts, in C. Schrader, V. Ramon and J. Vela (eds.), *Plutarco y la Historia: Actas del V Simposio Español sobre Plutarco, Zaragoza, 20-22 de junio de 1996*, Zaragoza 1997, 461-466.
- Vinogradov (1) = Ю. Г. Виноградов, Синопа и Ольвия в V в. до н. э. Проблема политического устоя, ВДИ 1981, № 2, 65-90. (Yu. G. ヴィノグラードフ「前5世紀のシノペとオルビア—政治制度の問題」『古代史通報』1981年, 第2号, 65-90頁. なお同論文の第2部(部分II)は, 『古代史通報』1981年, 第3号, 49-75頁に掲載されている.)
- Vinogradov (2) = Ю. Г. Виноградов, Политическая история Ольвийского полиса VII-I вв. до н. э.: Историко-эпиграфическое исследование, Москва 1989. (Yu. G. ヴィノグラードフ『前7～前1世紀のオルビア・ポリスの政治史—歴史・碑文学的研究』モスクワ, 1989年.)
- 篠崎 (1) = 篠崎三男「前5～4世紀における黒海北岸ギリシア世界の変容—ユーリー=ヴィノグラードフの近業」『バルカン・小アジア研究』第13号, 1987年, 1-20頁.
- 篠崎 (2) = 篠崎三男「黒海北岸のギリシア世界」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ—古典古代の比較史的考察』河出書房新社, 1988年, 495-519頁.